

## 1 実践的安全教育モデル（交通安全教育）

### (1) モデル地区について

全国で登下校中の児童生徒が死傷する事故が相次いで発生している中、せたな町においても交通量の多い道路を児童生徒が通学路として使用している現状があり、特に北檜山小学校においては、国道を通学路として使用していることから拠点校として設定した。

通学路における安全確保及び自転車による事故等の未然防止を徹底することを通して、自他の命を守るために主体的に行動したり、安全確保の方法を理解し行動したりする児童生徒の育成を図ることを目標として、本事業を推進した。

これまでの取組を踏まえ、次の4ポイントを示す。

### (2) 実践的安全教育モデルのポイント

#### 【モデルPOINT①】既存の組織の活用

○既存の組織を生かした交通安全の取組の推進

##### モデル地域の取組 ～せたな町通学路安全推進協議会

本事業の成果を継続できるよう、交通安全における連携体制である「せたな町通学路安全推進協議会」を基盤に、交通安全に係る取組を推進したことにより、合同点検はもとより、交通安全教室、公開授業にも同組織の構成員が積極的に参加し、地域との連携体制を充実させることができた。



せたな町通学路安全教育推進協議会

#### 【モデルPOINT②】観点の明確化

○合同点検時の観点の焦点化

##### モデル地域の取組 ～合同点検時の観点の焦点化

学校教職員の危機意識の高まりと、学校が把握している保護者や地域住民の声を踏まえ、合同点検の重点箇所（2カ所）を選定し、今年度初めて点検項目を明確化したことにより、点検後の協議において、それぞれの立場から、通行車両に安全な速度を促す交通環境の工夫や、飛び出し、衝動性などの児童の特性を考慮した安全教育の必要性など、危険箇所における安全確保に向けた取組について意見が活発に出された。

## 【モデルPOINT③】 改善策の検討・実施

○要対策箇所への改善策の検討・実施

### モデル地域の取組 ～要対策箇所への改善策の検討・実施

合同点検後、速やかに要対策箇所について改善策を協議したことにより、カーブ直後の赤信号に対し、乗用車の減速を早めるための道路標識の位置の改善について意見が出された。

国道の道路管理者である北海道開発局内で検討を重ね、推進委員会において具体的な道路標識の移設場所について了承を受け、実際に移設することとなった。



要対策箇所の改善策の実施

## 【モデルPOINT④】 安全教育の実施

○安全教育の実施（発達の段階を踏まえた安全教育の実施）

### 拠点校の取組 ～発達の段階を踏まえた安全教育の実施

合同点検では、車の運転手に減速の意識が低いことから、特に児童に左右確認の意識を高める必要性について意見が出されたため、第1学年を対象にした交通安全教室では、警察官を講師に招聘し、道路横断時に、「止まる、見る、確かめる」を合い言葉に左右確認を徹底し、安全な道路横断の意識喚起を図った。

また、交通安全に係る公開授業を第5学年対象で実施し、通学路の危険箇所に関する安全マップ作りを通して、縦割り下校訓練時に注意すべき点について児童に意識させることができた。



第1学年 交通安全教室



第5学年 公開授業

#### (4) 実践を振り返って

交通安全に係る公開授業では、第5学年を対象に実施し、通学路の危険箇所に関する安全マップ作りを通して、縦割り下校訓練時に意識すべき点について明確になった。

児童からは、「冬道になったら」、「低学年なら」など、季節の変化や対象者などを意識した発言も多数見られ、交通安全に向けて主体的に行動しようとする姿が見られた。

公開授業後の研究協議では、学校の教員だけでなく、警察や道路管理者、役場職員も参加し、活発な意見交流が行われたことにより、発達の段階を踏まえた指導の重要性を確認するとともに、幼児への指導や、高校生、大人への啓発の方向性が明確になった。

せたな町の既存の組織である「せたな町通学路安全推進協議会」を基盤に本事業を推進したことにより、学校と関係機関とが連携した取組を充実し、次年度以降の協議会の方向性も見いだすことができたことは、本事業の成果といえる。

(意見の一部)

- ・小学校の交通安全教育を発展的に中学生以上への指導につなげていく必要がある。
- ・児童が助手席に乗っている時に、運転者である保護者に注意を促す視点で注意すべき点を話し合わせてもよいのではないか。大人への啓発にもつながると思う。

また、第2回北海道実践的安全教育モデル構築推進委員会では、自転車の指導を今後、どのようにしていけばよいのかということが協議された。

(意見の一部)

- ・実際に目の前でスタントマンによる交通事故のデモンストレーションを見る体験は、生徒に自転車の安全利用の意識を高める上で有効である。
- ・ハザードマップに危険箇所の写真を付ける工夫も、自転車運転の危険箇所を意識させる上で効果的である。
- ・被害者だけでなく、加害者にもならないよう、危険箇所を予測させる教育が必要である。

各学校等において、本モデルや推進委員会の意見を参考に、交通安全教育の充実を図っていただきたい。